

元子どもの兵士、 自立への道



認定NPO法人テラ・ルネッサンス
啓発チームマネージャー
栗田 佳典さん

1986年静岡県生まれ。立命館大学産業社会学部卒。大学在学中に世界の貧困問題、子ども兵の問題に強い関心を持ち、テラ・ルネッサンスヘインターンシップ生として参加。大学卒業後、職員として勤務。イベント等の啓発活動、講演活動等を行っている。



元子ども兵だった女性たちが受ける洋裁の授業。ミシンでの縫い方を皆真剣な表情で聞く(写真提供:テラ・ルネッサンス)

世界に 25 万人もの子ども兵

——「子ども兵」を含む、現在の活動について教えてください。

「テラ」は「地球」、「ルネッサンス」は再生の意味です。京都で活動しています。2001年の設立当初は、カンボジアの地雷撤去を支援するための活動から始まりました。2004年に「少年兵(子ども兵)」という言葉がスタッフによって調べると、日本のNGOでは現状を伝えても現地に活動現場を持っている団体はほとんどないことを知りました。私たちはより深く現状を把握するためにイギリスのNGOを訪問し、聞き取りをしました。その結果、今も多くの課題が残っており、英語圏であるなどの理由から、活動拠点をウガンダに決定しました。

——そもそも子ども兵とはどのようなものですか。

18歳未満の男女の兵士を指します。世界に25万人はいるといわれています。子どもが兵士になった背景には大きく分けて①誘拐されて強制的になる、②自分の意思でなる、の2つの理由があります。ウガンダでは、現在まで6万6,000人の子どもが誘拐され、兵士にさせられたと報告されています。女の子の兵士は、強制結婚や性的奴隷の対象となるといったつらい過去を持っています。

さらに、元子ども兵は被害者であると同時に加害者ともなります。そのため、村に戻っても「なんで戻ってきたんだ、この村から出ていけ」と責められることが多い。当会が支援する元子ども兵は20歳代が多く、従軍期間が10年と長い場合

はとくに復帰が難しいとされています。元子ども兵が連れて帰ってくる、彼らの子どもへも間接的に支援しています。

—どのような支援をするのですか。

自立しても孤立したら意味はないですから、英語や裁縫、ミシンの使い方といった自立のための支援とともに、近隣住民との関係修復のための支援も行っています。

(栗田さんが見せてくれたのは、2015年8月にNHKで放送された、女優の石原さとみさんがウガンダを訪れたドキュメンタリー。その『元子ども兵たちの復帰支援』では、家具を作る元子ども兵たちの、未来に向かって努力する姿が描かれている。)

支援を通じ、彼らはつらい過去や厳しい現実があっても、前を向いていると感じます。私たちは「助けてあげている」という気持ちは一切なく、一緒に走る伴走者のような役目です。回復にはそれぞれのスピードがあるため、その子に合った自立するための環境を整えます。

自尊心が心の傷を癒す

—ふつうの子ども期を過ごさなかったという、心の問題が一番難しいと思います。

元子ども兵の子は暴力での解決法しか知らないため、近隣住民から何か言われるとすぐに手を出してしまいます。われわれは「解決すること、許すことはどういうことか？」という問いを投げかけ、相手と話すことや相手の立場に立つて考えることの重要性を伝えます。

また、周囲の変化も重要です。「出ていけ」と言っていた人たちが「ボタンのほつれを直して」と言ってきたり、元子ども兵の子が作ったアクセサリーを「いいね」とほめてくれたりすると、自分が必要とされていると感じて自尊心が高まっていきます。彼らの「できない」から「I can (できる)」が増えて、自信を持ちます。自分の能力で人の役に立てる、それが「生きていいんだ、ここに居ていいんだ」という思いを生み、心の傷を癒すことにもつながっていきます。(ここで栗田さんは一枚の写真を見せてくれた。そこには穏やかな表情で赤ちゃんを抱く女性の姿があった。)



アロボさんと栗田氏が「チカ」と名前を付けた赤ちゃん(写真提供:テラ・ルネッサンス)

アロボさんという女性です。家族状況をインタビューしているとき、「この子の名前を付けてください」と言われたんです。初めて会う私に心を開いてくれ、また赤ちゃんがいる事実にも嬉しかったです。

彼女はかつて子ども兵として戦い続けて、強制結婚もさせられました。村に戻ってきても外に出られず、居場所がなくふさぎ込みがちでしたが、できることが増えると自尊心の向上につながっていきました。技術を身につけ、収入を増やし、お洒落をして、街に出かけるようになり、そして愛する人と結ばれて結婚し、子どもを産みました。

未来を取り戻し、命をつないでいく。過去を見れば悲しいですが、そこから見えてくる希望もたくさんあります。私が一番伝えたいのは、元子ども兵それぞれが自身の力で「未来を取り戻している」という事実なのです。

すべて世界とつながっている

—彼らを応援する手立ては何かありますか。

私たちにできることとして、意識を持って消費行動を行うことが挙げられます。その対象の一つが、紛争地域で取れる鉱石です。例えばコンゴ民主共和国では、レアメタルと呼ばれる希少金属を資金源とする武装勢力が存在し、時にはそのレアメタルを奪い合うなかで、住民が巻き込まれることもあります。レアメタルでも、コルタンという鉱石は「タンタルコンデンサ」に形を変え、携帯の末端の一部に使用されています。すべてが武装勢力の資金源になるわけではありませんが、私たちの使っているもの、食べているもの、着ているもの、あらゆるものが世界とつながっていることを意識することが大切だと思います。消費者である私たちが信頼できる企業から買うなど、意思を持った行動こそが大切です。

—身近なこととしてとらえ、自分にできることをするということですね。

私が行う学校での教育では「今使っている携帯や資源を大切にしてください」と話します。壊れるまで使ってリサイクルする、捨てるのではなく、再利用するなど、今ある資源を有効活用することが大切だと思います。私たちの生活が世界とつながっていることを自覚し、自分の意思で動き、できることをすることが平和への一歩なのだとは私は思います。

(聞き手・前田真子)

認定NPO法人テラ・ルネッサンス

「地雷」「小型武器」「子ども兵」「平和教育」の問題に取り組む認定NPO法人。すべての生命が安心して生活できる社会(世界平和)の実現を目的に2001年10月に設立。

ホームページは <https://www.terra-r.jp/>